The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アナログ情報あってのデジタル情報
Author(s)	赤木, 攻
Citation	アジア太平洋論叢. 2025, 27(1), p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100864
rights	This article is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アジア太平洋論叢　27 巻 1 号 (2025)
Bulletin of Asia-Pacific Studies vol. XXVII(1) pp.1 -2.

アナログ情報あってのデジタル情報

The Original for Digital Transformation

赤木　攻*
AKAGI Osamu

前置きが少し長くなりそうである。

まだまだ駆け出しであったころの1975〜77年、縁あってチュラーロンコーン大学およびタムマサート大学の客員講師としてバンコクに長期間滞在する機会を得た。その滞在期はタイ現代史の中でも社会が大きく変動し、現在でも多くの研究者が関心を持つ時期と重なっており、私自身にとっても貴重な滞在であったと常々思っている。

1957・58年の2回のクーデタで政治権力を掌握し「開発」を掲げたサリット・タナラット首相時代（1959〜63）とその体制を引き継いだタノーム・キッティカチョーン首相時代（1963〜73）の長期にわたる徹底した軍部独裁政治を崩壊させ民主化を推し進めた1973年の「10・14政変」と、わずか3年後にその民主化の潮流を反転させ再度軍部政治を復活させた1976年の「10・6事件」の二つの大事件がタイ社会を根底から揺るがせている時期であった。

私は時間があれば本屋回りをするのが常であった。赴任してすぐに感じたのは、「（学術、評論）雑誌」類の増加と安価な「ポケットブック（小冊子）」の出現であった。それまでの長い軍事政権下で抑えられていた言論の自由が「10・14政変」で解き放されたのであろう。後で考えると、その時期はいわば「言論爆発（出版革命）」が生じていたと言える。実際、代表的評論誌『社会科学評論』が多数の知識人や若手執筆者を育て大きく成長し言論界を活性化したのをはじめ、各大学や学会による学術雑誌が急増したのもこの時期である。また、毛沢東やチェ・ゲバラなどの左翼思想を紹介した安価な「ポケットブック（小冊子）」が街の新聞販売屋台にも並び、容易に手に入った。これらの出版物には、著者（編集者）名、出版社（者）名、出版年月日などが明記されておらず、パンフレットに近いものも多かった。

ところが、「10・6事件」を機にそうした状況は一変してしまった。官憲による左翼系出版物の検閲が始まり、多くの雑誌や「ポケットブック（小冊子）」が押収されたり発禁処分を受けたりした。焚書の目に遭った書籍も相当数に達する。発禁処分を受けても雑誌名や出版社名を変更して発行を続ける努力を試みた出版人もいたが、ほとんどが廃刊に追い込まれた。

私は、その時の滞在では、主として社会科学関係の出版物は可能な限り購入し、日本に持ち帰りたいと考えていた。大阪外国語大学の研究室や図書館にも文芸や歴史関係を中心にタイ語の原書はある程度は揃っていたが、まだまだ不十分であり、自分の研究にはもちろんのこと、将来の日本における「タイ学」のためにも「資料」として収集するのは重要な仕事であると思っていた。だから、薄い雑誌や「ポケットブック（小冊子）」のような一見価値のないような書物も目に入れば購入していた。

そうした考えは、その後のタイ訪問や滞在の際にも続いた。また、日本からバンコクの書店に注文して入手することも後々可能になり、多くの原書を取り寄せた。おかげさまで（？）、今や「おさむ文庫」と名付けているそれなりに広い私の書斎はタイ語書籍（資料）で満杯である。

突然のことだが、昨年その書斎で雑誌探しをしなければならない羽目になった。私が多様なタイ語雑誌を所有していることを知っている知己の研究者から1973年発行のある雑誌を持っているかどうかとの問い合わせがあったのである。どうやら、タイの図書館で探しても見つからないというのである。そこで、私は数日かけて久し振りに雑誌探しを行った。運よく見つかり、ご本人も喜んだ。

* 大阪外国語大学名誉教授

タイの図書館にもないような書籍が我が書斎から出てきたことに驚いた。とりわけ、「10・14政変」後に出版された左翼思想に関する書籍は「10・6事件」後の出版界の混乱の中で焚書を含む数奇な運命を辿った可能性が高い。ともあれ、そうした書籍も研究者にとっては重要な資料であることは間違いない。

そろそろ本題に入らねばならない。

実は高齢者の仲間入りした私がいま最も苦慮しているのが、上述の「雑誌」や「ポケットブック」を含む「おさむ文庫」のタイ語蔵書を中心とした資料の整理・処理である。可能な限り若い世代の研究者が利用しやすいかたちで残したいと思う。しかし、現実は厳しく、大学の図書館などに寄贈しようにも受け入れが難しいところがほとんどである。収蔵庫に余裕がないというのが最大の理由であるが、タイ語の資料を整理する司書がいないというのも大きなネックとなっている。

戦後の日本におけるアジア・太平洋、中東、アフリカ関係の地域研究者が残している原書を中心とした資料蓄積は膨大であろう。しかし、その貴重な資料の保存がないがしろにされているのではなかろうか。紙を基本とするアナログ情報は劣化し使用に耐えられなくなる虞がある。いずれかの公的機関が中心となって、そうした資料を収集保存し、閲覧に供する専門のセンターを発足させて欲しいものである。

アナログ情報時代からデジタル情報時代に急速に移りつつある現在、いかなる情報・資料もいずれデジタル情報として世界各地から簡単に入手することができるようになるという話をよく耳にする。これからのデジタル時代の研究者は、アナログ時代とは異なり、それほどアナログ資料を掻き集める必要はないであろう。デジタル資料は保存しておく物理的空間を必要としないし、検索、コピー、送受信なども簡単である。情報・資料収集の様々な負担は大きく軽減されるだろう。私のようなアナログ時代の研究者よりはスマートな研究活動が可能になるに違いない。

しかし、スマホすらまともに使えないアナログ人間の私にはよくわからないが、多くの情報はアナログ情報あってのデジタル情報であると思う。情報の最終確認のためにはアナログ情報に帰らなければならない場合が多いのではなかろうか。「おさむ文庫」に残っていた薄っぺらい汚れた雑誌が必要な場合があるかも知れないのである。